

E

橋の下世界音楽祭 | SOUL BEAT ASIA (愛知・豊田)

橋の下世界音楽祭は、豊田を拠点に活動するバンド・TURTLE ISLANDのメンバー、レーベル・microAction、橋の下世界音楽祭の運営チーム・火付ぬ組を核とし、これまで自治による「祭り」、「農業」、「市場」を集結した民衆の表現を展開してきました。国家の内部で参加型地域社会を作り出すこのプロセスは、民衆が政治に関与し、またそれを管理する能力を醸成し、国家や資本の在り方を再考させます。本展では、永山愛樹、竹舞 (TURTLE ISLAND) 根木龍一 (microAction) へのインタビュー映像を通し、日常の自主的な創造活動が、どのように個と社会の変革プロセスに与しているのかに焦点を充てます。

- 57. 《橋の下世界音楽祭 SOUL BEAT ASIA 2018》2018、スライドショー、撮影 | 三浦知也
- 58. 《橋の下世界音楽祭インタビュー》2022、シングルチャンネルビデオ、54'19"、撮影・編集 | 川上幸之介
- 59. 《橋の下世界音楽祭 SOUL BEAT ASIA 2018》、シングルチャンネルビデオ、05'31"、撮影・編集 | 三浦知也
- 60. TURTLE ISLAND 《LIVE IN TURTLE ISLAND》2022、レコード
- 61. 《橋の下世界音楽祭 SOUL BEAT ASIA》手ぬぐい
- 62. 《橋の下世界音楽祭 SOUL BEAT ASIA 2022》リストバンド

F

参考資料
 テーブル上の資料は、お手にとってご覧いただけます。
 絶版の書籍など、貴重な資料ですので、丁寧にお取り扱いいただくようお願いいたします。
 また、みなさまにご覧いただけるよう、お読みになった資料は必ず元の場所にお戻しください。

Punk! The Revolution of Everyday Life 展 カタログ
 ・『増補新版 PUNK! The Revolution of Everyday Life 展覧会カタログ』(倉敷芸術科学大学芸術学部 川上幸之介研究室、2022)
会場にてご購入いただけます。

ポットラック新聞
 ・『ポットラック新聞 Vol.16』(港まちづくり協議会、2022)
 P04-05 本展覧会記事掲載
1F 受付にて配布中 (無料)

カール・クラウス
 ・カール・クラウス 著、小松太郎 訳『モラルと犯罪』(法政大学出版局、1970)
 ・カール・クラウス 著、山口裕之・河野英二 訳『黒魔術による世界の没落』(現代思潮新社、2008)

ダダ
 ・トリスタン・ツアラ 著、小海永二・鈴木和成 訳『ダダ宣言』(竹内書店、1970)
 ・フーゴ・バル 著、土肥美夫・近藤公一 訳『時代からの逃走』(みすず書房、1975)

レトリズム
 ・『Isidore Isou. Collection Fabre, Vol. I 』(La Lettre Volée、2019)

シチュアシオニスト・インターナショナル
 ・『Leaving the 20th Century: The Incomplete Work of the Situationist International』(Rebel Press、1998)
 ・Raoul Vaneigem 『Knowing How to Live or the Revolution of Everyday Life: Pt.1: An Illustrated Reader』(Just Press、2010)

ブラックマスク&アップ・アゲインスト・ザ・ウォール・マザーファッカー
 ・『Black Mask & Up Against the Wall Motherfucker: The Incomplete Works of Ron Hahne, Ben Morea, and the Black Mask Group』(PM Press、2011)

キング・モブ
 ・『THE GREAT BRITISH MISTAKE VAGUE 1977-92』(AK press、1994)
 ・Tom Vague 『King Mob Echo: From Gordon Riots to Situationists and "Sex Pistols"』(AK Press、2000)
 ・Tom Vague 『King Mob Echo: English Section of the Situationist International』(AK Press、2006)
 ・David Wise 『King Mob: A Critcal Hidden History』(Bread and Circuses、2014)

キング・モブ関係
 ・Roger Perry 『The Writing on the Wall』(Plain Crisp Books、2015)
 ・『Vote for Guy Fawkes: Poster Workshop 1968-1971』(Four Corners Books、2018)

セックス・ピストルズ関係
 ・Mark Perry 『Sniffin' Glue: And Other Rock 'n' Roll Habits』(Omnibus Pr & Schirmer Trade Books、2009)
 ・Paul Gorman 『The Life & Times of Malcolm McLaren: The Biography』(Constable、2020)

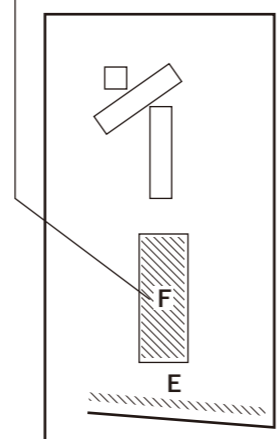
クラス
 ・Ian Glasper 『The Day the Country Died』(Cherry Red Books、2007)
 ・『Stop the War: A Graphic History』(Francis Boutle Publishers、2011)
 ・Penny Rimbaud 『Last of the Hippies: An Hysterical Romance』(PM Press、2015)
 ・David King 『David King Stencils: Past, Present and Crass!』(Gingko Press、2019)
 ・Rick Poynor 『David King: Designer, Activist, Visual Historian』(Yale University Press、2020)

ライオット・ガール
 ・『The Riot Grrrl Collection』(The Feminist Press at CUNY、2013)

クィアコア
 ・『Queercore: How to Punk a Revolution: An Oral History』(PM Press、2021)

橋の下世界音楽祭
 ・『橋の下世界音楽祭 2022 祭開催声明』(出典：橋の下世界音楽祭 SOUL BEAT ASIA 2022 WEB サイト https://2022.soulbeatasia.com/)

参考資料



MAT Exhibition vol.11

パンク! 日常生活の革命 名古屋



2022/8/26/Fri. – 11/12/Sat.

会場 | Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F: Exhibition Space

キュレーション | 川上幸之介
企画 | Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]
主催 | 港まちづくり協議会
協賛 | モトヤユニテッド株式会社

協力 | 居原田 遥、菅野優香、久保田 徹、竹舞、永山愛樹、名古屋学芸大学、名古屋芸術大学、根木龍一、BRONZE FIST RECORDS、三浦知也

設営 | ミラクルファクトリー (青木一将)
設営スタッフ | 浅沼香織、宇留野 圭、木下雄二、丸山のどか

MAT, Nagoya
ディレクション | 青田真也、吉田有里
コーディネート | 山口麻加
アシスタント | 大野高輝、半澤奈波
インターン | 林 瑞紀

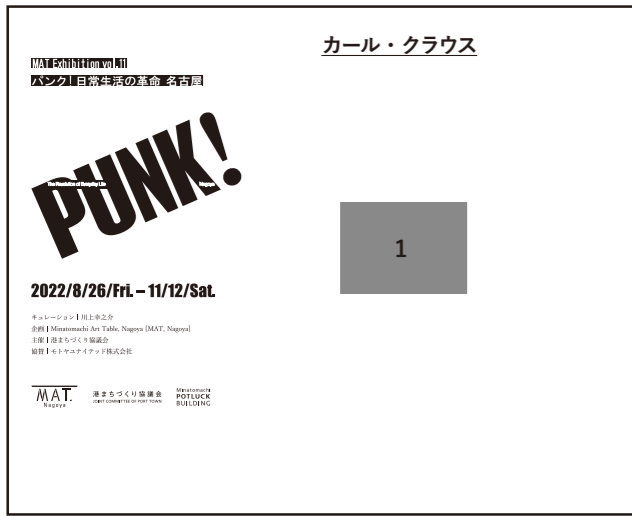


鑑賞ガイド

- ・1F 受付で貴重品以外の手荷物をお預かりし、サコッシュとヘッドホン、キャプションマップをお渡しします。
- ・3F 会場入口にある丸椅子と座布団は会場内でご自由にご使用いただけます。
- ・会場内の映像作品は、モニター下部にある★型のイヤホンジャックにヘッドホンのプラグを挿してご視聴ください。(最大 5 名まで視聴可能です。) 他の鑑賞者の妨げにならないよう、慎重にイヤホンジャックの抜き差しをお願いします。
- ・一部の ZINE をのぞいて、会場内の展示物には、お手を触れないでください。参考資料はお手にとってご覧いただけます。
- ・お帰りの際は 1F 受付で手荷物を受け取り、サコッシュとヘッドホンを返却してください。
- ・物販については、3F で見本をご覧になって、購入希望物品をシートに記入していただき、1階受付までお持ちください。1F にて販売致します。

注意事項

・会場内は撮影・SNS 等での情報公開が可能です。
ただし、ミャンマー・パンクのパートについては、撮影やSNSなどでの情報公開を禁止しています。
 現在、ミャンマーでは、2021年の国軍のクーデターによって、民主化や自由を求める市民への弾圧や言論統制が起き、犠牲者が増え続けています。本展では、ミャンマー国内の軍の監視下で、日常生活や生命を脅かされながらも権利を求め活動をする THE REBEL RIOT をはじめとしたミャンマー・パンクスを紹介し、ミャンマーで起きている状況を来場のみなさんとともに考え行動する機会にしたいと考えています。彼らの活動がミャンマー国内で情報漏洩しないよう、ミャンマー・パンクのパートについては、会場での撮影や SNS などでの情報公開を禁止しています。また会場 3Fでは、THE REBEL RIOT のグッズの販売、ミャンマー・パンクへの寄付を行っています。



A

カール・クラウス | Karl Kraus (オーストリア)

世紀末ウィーンでドイツ系ユダヤ人として生まれたカール・クラウスは1899年に自身で創刊したジャーナル『ファッケル』への投稿を中心に、マスコミや権力者の腐敗、虚偽、欺瞞、不正を暴いてきました。本展でクラウスは、ヒトラーが政権を握る1年前の1932年、再び世界が大戦へと向かう緊張の高まるなか、カントの死後200周年を記念して書かれた『永遠の平和のために』を朗読します。同作では『世界の炎の中で言葉は世界に焼きつけられている』なか、世界の恒久的平和を祈った啓蒙の言説への回帰が叫ばれます。

- 1. カール・クラウス《永遠の平和のために》1932、シングルチャンネルビデオ、4' 39"

アルフレッド・ジャリ | Alfred Jarry (フランス)

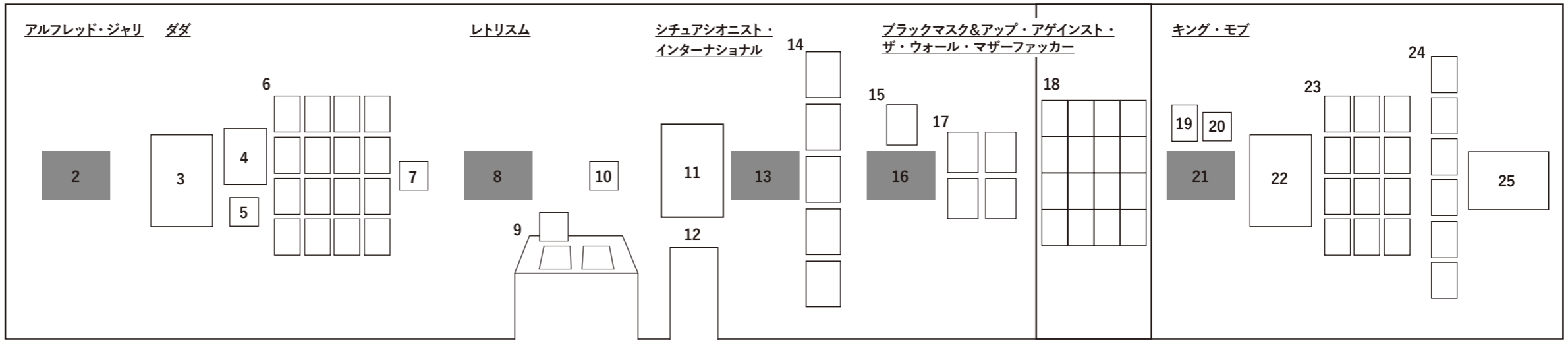
『くそつたれ!』で始まる『ユビュ王』は、劇作家、アルフレッド・ジャリにより書かれた、貴族を皆殺しにし、王位を篡奪したユビュ親父が、逆に追われる身となり諸国を流浪する不条理劇です。この不条理性は後のアルトー、イヨネスコなどに受け継がれていきました。シチュアシオニスト・インターナショナルのメンバーなどが、自らの系譜として位置付けたジャリによる本作は反体制主義のメタファーとしてモダニズムを超克します。

- 2. ジャン＝クリストフ・アヴェルティ《ユビュ王》1964、シングルチャンネルビデオ、1'37"00

ダダ | DADA

トリスタン・ツァラ、ヒューゴ・バルが辞典で偶然見つけて付けられたダダは、戦争嫌悪、既成概念への不信から「破壊と否定」を世界に表明しました。この精神は世界中に伝播し現代アートの源流となりました。本展ではダダのパンクへの影響といった始点に立ち戻るため、世界中への拡散のきっかけとなった初動『ダダ宣言 1918』『気取りのない声明』が掲載されたジャーナル『DADA 3』、ヒューゴ・バルの『Karawane』、モンタージュのレトリックを使い、アートにおける抵抗の政治性を獲得したジョン・ハートフィールドの『Never Again』が展示されます。

- 3. フーゴ・バル《Karawane》1916、ポスター、590mm×840mm



B

- 4. ジョン・ハートフィールド《Never Again!》1932、シルクスクリーン、420mm×594mm
- 5. ディスチャージ『Never Again!』1981、レコード
- 6. トリスタン・ツァラ編《DADA 3》1918、印刷物 (16枚組)
- 7. V/A『dada for now』1985、レコード

レトリズム | Lettrism

イジドール・イズーを中心としたレトリズムは、戦時中、プロパガンダによって封殺された言葉を解体し「語」を用いない音素の無意味な羅列による「詩的レトリズム」から始まり、映画、パフォーマンスといった多岐にわたるムーブメントを起こしていきました。彼らは文字を「音」「イメージ」へと変化させ、詩は音楽へ、書かれた文字は絵画となり、この変化する関係をアート、そして社会にまで拡張していきます。本展では、イズーの《涎と永遠についての概論》を通し、ダダやシュールレアリズムの実験が、いかに社会および政治的な領域へ拡張されたかを概観します。

- 8. イジドール・イズー《涎と永遠についての概論》1951、シングルチャンネルビデオ、2' 00"00
- 9. フランソワ・デュフレーン『叫びのリズム』1975、レコード (4枚組)
- 10. ジル・J・ウォルマン『L'Anticoncept』1951、レコード

シチュアシオニスト・インターナショナル | Situationist International

レトリズムから分裂して結成されたレトリズム・インターナショナル (LI) は、後にシチュアシオニスト・インターナショナル (SI) となりギー・ドゥポールを中心にして高度資本主義により、物質へと向けられる人びとの欲望を「状況の構築」により日常生活のなかで新たに再構築していきました。本展では、映画、ジャーナルを中心として、レトリズムから急進的な社会革命を志向し、レトリズムとは異なるアプローチを得た政治性の胚胎と、英語圏への波及を追います。

- 11. 原作：アンドレ・バートランド、英訳：キング・モブ《International Times, February 16-29, 1968. Situationist poster cover》1968、ポスター、592mm×843mm
- 12. ヨハン・クーゲルベルク『The Situationist Times : Facsimile Box Set Situationist Times』2013、ペーパーバック (7冊組)
- 13. ギー・ドゥポール《スペクタクルの社会》1973、シングルチャン

ネルビデオ、1'27"42

- 14. SI《Fin de l'université (End the University)》《Abolition de la société de classe (Abolition of class society)》《Occupation des usines (Occupation of factories)》《A bas la société spectaculaire-marchande (Down with the Spectacular-Market Society)》《Le pouvoir aux conseils zde travailleurs (Power to the workers' councils)》1968、印刷物 (5枚組)

ブラックマスク&アップ・アゲインスト・ザ・ウォール・マザーファッカー | Black Mask&Up Against the Wall Motherfucker

SIとともにキング・モブの実践と理論において大きな影響を与えた運動であるブラック・マスク、アップ・アゲインスト・ザ・ウォール・マザーファッカー (以下、UAW/MF) は、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) を閉鎖させたゲリラ・ハプニングを皮切りに、アナキストのデモンストレーション「ブラック・ブロック」を生み出した『ウォールストリートはウォーストリート』や、エリアごとの不均衡な施策に対するゲリラ・デモ『文化的交流：ゴミからゴミへ』を組織し、直接行動としてのアートの政治化を進めました。アートを用いたデモ戦術を繰り広げ「分析を伴うストリート・ギャング」というスローガンを提示した彼らの軌跡を、ジャーナル『ブラック・マスク』、UAW/MF自身の活動記録『文化的交流：ゴミからゴミへ』で辿り、パンクとの関係性を顕在化します。

- 15. ブラック・マスク《WE PROPOSE A CULTURE EXCHANGE (garbage for garbage)》1967、印刷物 (冊子より抜粋)
- 16. UAW/MF《We Propose a Cultural Exchange》1968、シングルチャンネルビデオ、11'45"
- 17. ブラック・マスク《Black Mask Issue 1-10》1966-1968、印刷物 (4枚組 | 冊子より抜粋)
- 18. UAW/MF《UAW/MF Leaflets & Articles》1968、印刷物 (16枚組 | 冊子より抜粋)

キング・モブ | King Mob (イギリス)

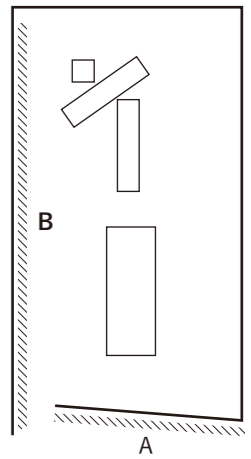
キング・モブはワイズ・ブラザーズとSIのプリティッシュ・セクションのメンバーを中心にロンドン市内のノッティング・ヒルを拠点として組織され、ジャーナル『キング・モブ・エコー』の発行と共に都市へのゲリラ的な介入により活動を活発化させていきます。1967年LSE (ロンドン・スクール・オブ・エ

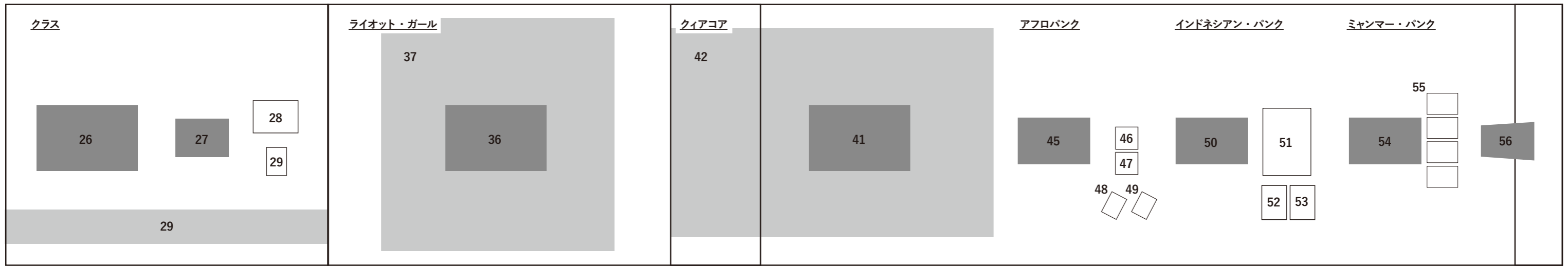
コノミー)の占拠運動、パウィ広場開放、マルコム・マクラレーン*も参加したゲリラ・ハプニング『「本来は素晴らしいはずが、実はとんでもない」告白：S. Clause 1968』などを組織しました。本展では「セックス・ピストルズがSIに端を発しているのであれば、ラディカルな閃光とバーレスクな怒りという彼ら特有のひねりは、ロンドンのノッティング・ヒルを拠点とするごろつき術学者達によってもたらされた」ことを『キング・モブ・エコー』、マルコム・マクラレーンのドラマ《Ghosts of Oxford Street》を通し検証し、現代アートからパンクへのファースト・コンタクトを明らかにします。

* マルコム・マクラレーン (Malcolm Robert Andrew McLaren, 1946年1月22日 - 2010年4月8日)は、イギリスのロックバンドのマネージャー、ファッションデザイナー、ミュージシャン、起業家。セックス・ピストルズおよびニューヨーク・ドールズの仕掛人として知られる。

- 19. キング・モブ《It was meant to be great but it's horrible"Confessions:S.Claus 1968》印刷物 (冊子より抜粋)
- 20. セックス・ピストルズ『Never Mind the Bollocks, Here's the Sex Pistols (邦題：勝手にしやがれ!!)』1977、デザイン | ジェイミー・リード、レコード
- 21. マルコム・マクラレーン《Ghosts of Oxford Street》1991、シングルチャンネルビデオ、13'22"
- 22. キング・モブ《Luddites: 69》1969、ポスター、550mm×840mm
- 23. キング・モブ《King Mob Echo 1-6》1968-1970、印刷物 (18枚組 | 冊子より抜粋)
- 24. キング・モブ《The Black Hand Gang》1968、印刷物 (6枚組 | 冊子より抜粋)、210mm×340mm
- 25. キング・モブ《Same Thing Day After Day...》1975、ポスター、840mm×540mm

Composite image by Roger Perry, Ellen Nail and Pearce Marchbank, running alongside the tube line between Ladbroke Grove and Westbourne Park stations © Roger Perry, Ellen Nail and Pearce Marchbank





C

D

クラス | CRASS (イギリス)

セックス・ピストルズ、クラッシュなどが資本のスペクタクルへと回収されるなか、アナキスト・コミュニオンを拠点として 1977 年にクラスは結成されました。彼らは音楽活動を核としてフェミニズム、反戦、反核、環境主義を直接行動により提唱していきます。本展ではパンクの根幹であった異議申し立てを資本のスペクタクルから奪回し、『パンクの中の「修復的な」反体制運動であり、政治的な転覆を図るシステムとしての重要性を再確認させることを目的』としたアナーク・パンクの始祖としてのクラスの活動をドキュメンタリーに加え、当時発行していたジン、アルバムワーク、ライブビデオを通し検証します。

- 26. アレクサンダー・エイ 《There Is No Authority But Yourself》2006、シングルチャンネルビデオ、1'04'00"
- 27. クラス ライブビデオ 「Live at Conway Hall」4' 52"、「Live at Conway Hall Holborn London 1979」1' 39"、「Live at Eve Libertine」5' 18"
- 28. ジー・ボシェ 《Bloody Revolutions》1980、リトグラフ、490mm×345mm
- 29. クラス 《Crass Zine》1977-1984、ZINE から抜粋 (複製)
- 30. クラス 『THE FEEDING OF THE 5000 THE SECOND SITTING』1980、レコード
- 31. クラス 『Christ - The Album / Well Forked - But Not Dead』1982、レコード
- 32. クラス 『Yes Sir, I Will』1983、レコード
- 33. クラス 『Best Before CD』1984、レコード
- 34. クラス 『PENIS ENVY』1984、レコード
- 35. ジー・ボシェ 『CRASS ART AND OTHER PRE POST-MODERNIST MONSTERS』1999、ペーパーバック

展示ケース内

展示台

展示ケース内

ライオット・ガール | Riot Grrrl

ライオット・ガールはアメリカ合衆国、ワシントン州オリンピア出身のガールズ・パンク・バンドを出発点として、ジェンダー平等を軸とながらも、児童虐待、人種差別、自己虐待などさまざまな抑圧や問題と闘うために団結し、コミュニティを形成した国際的なムーブメントでした。それは音楽、アート、ジン、グッズの DIY により波及していきました。本展では彼女たちのジンとともに、ケリー・コーチ監督の映画《Don't Need You: the

Herstory of Riot Girl》を通し、ライオット・ガールたちが世界中で繰り広げた「女性たちのための、女性による」近代社会の支配的な価値観に対抗する陣地線とともに、クィアコアとの結節点を明らかにします。

- 36. ケリー・コーチ 《Don't Need You: the Herstory of Riot Girl》2006、シングルチャンネルビデオ、39'10"
- 37. リサ・ダームス 《The Riot Grrrl Collection》2013、ZINE から抜粋 (複製)
- 38. X-レイ・スペックス 『Germfree Adolescents』1978、レコード
- 39. ザ・スリッツ 『Cut』1979、レコード
- 40. ビキニ・キル 『Revolution Girl Style Now』1991、レコード

展示ケース内

クィアコア | Queercore

カナダで発行されたイデオロギー的かつ扇動的なジンである『J.D.s』の1985年の創刊から始まったクィアコアは、権利を剥奪されたクィア・パンクスの地下ネットワークを育み、マス・マーケットの外で、同性愛嫌悪、性差別、人種差別といった問題に対して自分たちの物語を語り、創り出す場を切り開くため、音楽を主として国際的に広がったムーブメントです。本展では『J.D.s』とともに、ヨニー・ライザー監督による《Queercore:How To Punk A Revolution》を通して、現在までに至るパンクを用いた性的マイノリティの権利の奪還と、クィアコアとライオット・ガールの政治的な交差を明らかにし、新たなシーンの軌道と拡散を追います。

- 41. ヨニー・ライザー 《Queercore: How To Punk A Revolution》2017、シングルチャンネルビデオ、1'23'00"
- 42. G. B. ジョーンズ、ブルース・ラブルース 《J.D.s》1985 - 1991、ZINE から抜粋 (複製)
- 43. G.L.O.S.S. 『Trans Day of Revenge』2016、レコード

展示ケース内

*** スピットボーイ | Spitboy**

スピットボーイは 1990 年にカリフォルニア州サンフランシスコのベイエリアで結成されたアメリカのアナクロ・フェミニズム・パンク・バンドで、同時代のライオットガールとは距離を置いて活動していた。家父長制、性役割、ミソジニー、セクシズム、階級、人種差別を積極的に批判し、グリーンデイ、オペレーション・アイビー、フガジといったパンクスからも支持を

得ていた。1995 年に解散するまで複数のアルバムをリリースし、来日もしている。メンバーはその後、Instant GirlやAus Rottenで活動し、ドラマーのミシェル・クルーズ・ゴンザレスとボーカルのエイドリアン・ドルガスは現在、作家としても活動している。日本でもゴンザレスの『スピットボーイのルール 人種・階級・女性のパンク』（鈴木智士 編集・翻訳）が出版されている。

- 44. スピットボーイ 『Body of Work』1990-1995、レコード

展示ケース内

アフロパンク | Afropunk

2003 年に公開されたジェームス・スプーナー監督によるドキュメンタリー映画《アフロパンク》から生まれたアメリカ国内のアフリカ系アメリカ人によるパンクシーンは、2005 年にスプーナーが、ブルックリンでミュージック・フェスティバル「アフロパンク・フェスティバル (Afropunk Festival)」を開催したことによって、一大ムーブメントを引き起こしました。このムーブメントは、パンクの西洋中心主義的な通史を批判し、再文脈化を促しました。本展では、アフリカン・ディアスポラがアンダーグラウンド・カルチャーからオルタナティブ・アート・シーンの祭典という都市空間と自律的文化としてのサード・スペースをいかに切り開いたかを考察します。

- 45. ジェームズ・スプーナー 《アフロ・パンク》2003、シングルチャンネルビデオ、01'00"03
- 46. ピュア・ヘル 『Noise Addiction』2005、レコード
- 47. デス 『...For the Whole World to See』1975、レコード
- 48. ラムダシャ・ビクシーム 『GUNK #4, Ramdasha Bikceem』1994、ZINE
- 49. ジェン・スミス 『Another Lo-Fi Xtravaganza: Testimony #1: "Patrice"』1993、ZINE

インドネシアン・パンク | Indonesian Punk

世界最大のムスリム人口を抱え、国民の約 9 割がイスラム教徒であるインドネシアにおけるパンクシーンは社会変革のための急進的な活動全体に貢献し、開発独裁政権かつ、権威主義体制を崩壊へと導きました。本展ではインドネシアのパンクスが、どのようにローカル・レベルで姿を現した音楽・文化産業を民主化し、都市における独自の「トランスローカルな空間」

といった歴史物語を形成したのかを、ドキュメンタリーと Zine を通して概観します。

- 50. Noisey - Music by VICE 《Punk Rock vs Sharia Law - Music World - Episode 5》2014、シングルチャンネルビデオ、20'49"、(Producer: Host Milène-Larsson, Director: Camera-Grant Armour, Fixer: Co-Host-Kartika Jahja)
- 51. 作者不明 《Hullabaloo 1, GOR Saparua Gigs Poster》1994、ポスター、Courtesy by Frans Ari Prasetyo
- 52. ライオティック・レコード 『Submissive Zine No.3』1998 Courtesy by Frans Ari Prasetyo、ZINE
- 53. Front Anti Fasis (FAF) 『Militansi Zine』1999 Courtesy by Frans Ari Prasetyo Ari Prasetyo、ZINE

ミャンマー・パンク | Myanmar Punk 撮影禁止

イギリスと日本による植民地支配を経た後に、50 年以上にわたる軍事独裁政権と、それに対する民衆の蜂起という不安定な政治情勢が繰り返される歴史の中、対抗文化を通して連帯するミャンマーパンクスは、音楽活動を主としながら、ボランティアやワークショップを行い、自主管理型地域社会を伸展させています。本展では 2021 年のミャンマー国軍によるクーデター以前における音楽を通じた他民族との共生について、久保田徹のドキュメンタリー作品を通して検証します。

- 54. 久保田徹 《Punk Save the Queen》2018、シングルチャンネルビデオ、19'53"
- 55. THE REBEL RIOT 2022、インクジェットプリント、撮影 | Kaung Kaung
- 56. ミャンマー・パンクス、スライドショー

